

沖ノ島の自然―自然崇拜の根源を探る―

岡 崇

はじめに

平成十九年以來、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産登録事業に携わり、様々な活動を行ってきた。特に本資産の中心でもある沖ノ島には、海の道むなかた館における沖ノ島の3D映像や必要に応じた写真の撮影、福岡県のレッドデータブック作成にともなう調査や国指定史跡「宗像神社境内」・国指定天然記念物「沖の島原始林」の保存管理計画策定のための調査、世界遺産としての価値を議論するために行われた有識者の視察など、世界遺産に関する様々な活動に際して渡島してきた。厳格な禁忌によって一般の人間の渡島が禁止されている沖ノ島において、大社の神職を除けば、筆者の渡島回数は最もとなるのではなからうか。

沖ノ島は、昔から「不言島」という禁忌があつて、守られてきたという経緯がある。その一方で、昭和二十九年から昭和四十六年にかけて実施された学術調査によって、信仰の中枢ともいべき祭祀遺跡の状況が明らかとなった。禁忌との葛藤の中、渡島を重ねることに、実際に渡島した者だからこそ知りえた情報を公表することで、通常立ち入れない沖ノ島の価値をより多くの方に理解していただき、沖ノ島を保護する意識を高めてゆきたいと思いが強

くなつた。禁忌と正しい知識をもつて人類共有の財産として守っていくことが求められている。その手始めとして、その場所に生息繁殖する動植物の特異性をとりあげることとする。今回報告する内容は、下記の2つの調査で知り得た情報と既に実施されていた宗像市自然環境調査の報告書を基に沖ノ島の自然について再考したものである。

1. レッドデータブック作成にともなう調査

平成二十三年十一月に発刊された福岡県のレッドデータブック作成にともなう沖ノ島の調査は、平成二十二年六月二日から五日にかけて実施された。福岡県環境部自然環境課野生生物係が主体となつて実施したレッドデータブック作成にともなう調査は、植物・須田隆一氏(福岡県保健環境研究所)、哺乳類・船越公成氏(鹿児島国際大学教授)、鳥類・武石全慈氏(北九州市立自然史・歴史博物館)、岡部海都氏(財団法人九州環境管理局)、爬虫類・両生類・山根明弘氏(北九州市立自然史・歴史博物館)、昆虫類・三枝豊平氏(九州大学名誉教授)、矢田脩氏(九州大学名誉教授)などの動植物に関する第一線で活躍する研究者によって実施された。

二つ目はそれに同行しそのとき知り得た情報を取りまとめたものを報告する。

2. 国指定天然記念物「沖の島原始林」保存管理の基礎調査

二つ目は、平成二十六年三月に発刊された宗像市教育委員会の『国指定史跡「宗像神社境内」、国指定天然記念物「沖の島原始林」保存管理計画書策定』にともなう沖ノ島の調査は、平成二十四年八月七日から十日まで(夏の調査)および平成二十四年十月九日から十月十二日まで(秋の調査)の二回実施された。おもに、アジア航測株式会社による航空測量および赤色立体測量(航空レーザー測量)・3次元数値標高モデルを作成し、その図面を基に現地の詳細な観察を行った。また、株式会社プレック研究所によって詳細な植生調査が実施された。この現地調査に伴い踏査に同行しその後の分析から得られた取りまとめたものを基に報告する。

沖ノ島における自然系の調査は、竹内亮氏による一九三三年の沖の島学術調査報告にはじまり、福岡県高等学校生物部会が一九七二年に発行した「沖の島生物総合調査報告」や長崎生物学会が発行した「壱岐の生物」には、詳細な動植物の把握がなされている。ベースとなる資料は、そちらに譲るとして、今回の報告は、これまでの調査で得られた情報を基に、これからの沖ノ島に対する保存、管理に関する課題などを抽出し、自然崇拜の根源となっている自然の在り方について考える一助となれば幸いである。

一 植物

沖ノ島の植生調査では、コドラート調査という手法がとられた。各地点の特徴ある場所をいくつか選び出し、その地点において十m四方にどのような植物が生えているのか、植生の状態をつかむというものである。この調査ではあわせて航空測量も実施し、同時に上空からの写真によって沖ノ島の植物を把握し、沖ノ島全島の植生図を完成させた。

大正十五年十月二十二日に国指定天然記念物となった「沖の島原始林」は、指定当時島の奥深くまで人が立ち入ることは容易ではなかったはずである。指定内容を見ても、「有史以来斧を一度も入れたことのない：」とあり、沖ノ島は「原始林」であるという認識が当時は今より濃厚であったことが想像される。「原始林」という言葉は、日本の古い時期に指定された指定名称に良く使われている。「原始林」は、有史以来人の手を全く受けていない樹林といった意味合いである。その二方で良く使われる、「原生林」は、いわゆる植林をしていない自然林が残っている樹林帯を指す。例えば、一旦伐採された後で本来そこに自生する植物が再生すれば、それは「原生林」と呼ぶ。

昭和十六年から二十年にかけての第二次世界大戦時において、沖ノ島は大陸の最前線と位置づけられ、日本軍による軍事施設が設置された。戦時遺構については次の「沖ノ島研究」で触れるが、多い時で二百名が常駐していたとされる。「原始林」がどこまで保たれたのか、これまで調査がなされることはなかった。今回、保存管理計画に伴い初めて基礎調査を行ったところ、軍事施設そのものは、外から見えるものではなくむしろ隠す必要

があつたため、その当時あつた大木を避けて作られていることが分かった。特に海軍兵舎跡等の石垣は、今も大木であるタブノキを避けて石を組んでいたり、樹木を残すために円柱の石垣を組んでいる箇所がいくつも確認された。その一方で、灯台に登る参道周辺は、明らかにその当時伐採された木々が何箇所も確認された。小さな幹がいくつも枝分かれしている株が見受けられ、その行為が行われた時期は、成長過程から察して樹齢およそ六十年から七十年くらいではないかと考えられる。

このことから、沖ノ島が「原始林」として百パーセント保たれているとは言えないが、戦時遺構を除く大部分は「原始林」として現在も維持されていると結論付けられるだろう。特に、沖ノ島祭祀遺跡周辺や黄金谷などでは、「原始林」の状態が非常に良好に保たれている。

(1) タブノキ

沖ノ島の樹木は、タブノキ(写真①)、ヒゼンマユミ、ナタオレノキ、イスノキ、クワノハエノキなどが自生している。特に沖ノ島の主体となる植生であり、「沖の島原始林」の核となる樹木がタブノキである。通常、九州本土側のタブノキは、シイやカシといったドングリ系の重力散布による植生との共存が常であるといわれる。ドングリなどの種から新芽を出して実生ができ、それが成長して大木になるのである。しかし、沖ノ島では、タブノキが優勢し、ドングリ系の樹木は皆無である。保存管理計画に伴う調査においては、大木はあつても地面に実生が見当たらないことから、タブノキがどのようにして増えているのかということが議論となった。

このままでは沖ノ島のタブノキが消滅してしまうのではないかと危機感さえ感じたが、実は沖ノ島では本土のような増え方をしているのではないかと新しい考えが生まれた。沖ノ島のタブノキの大木を観察すると、老木の幹の表面が腐り、一部は土のようになつている。その幹肌には、無数の小さな小枝が出てくる、いわゆる「ひこばえ」であつた。そして、既に大木となつているタブノキを見ると、もちろん単体のものもあるが、中には、二本一対のようなもの、さらには、一株に四本五本と枝わかれているものもある。これは、朽ちかけた老木から生えてきた「ひこばえ」が次の大木へと育つことを示している。沖ノ島のタブノキはこのような増え方をして子孫を残し今日に至っていると推測している。

さらに、沖ノ島全体の植生の変化を次のようにダイナミックに捉えることもできるだろう。台風などによつて大木が倒れると、それまで暗かった地面が一気に明るくなる。すると、日が差すようになった地面から下草が一斉に生え、オオミズナギドリでさえ巣を作れなくなるような密度の高い状態になる。しかし、倒れた大木から出た新芽が長い年月かけて成長すると、再び地面に日が射さなくなる。すると下草は生えなくなり、オオミズナギドリの巣などが穿たれ、その活動によつてさらに草が生えなくなるといった変化を繰り返しているのではないかと考えられる。



写真①タブノキ

(2)ヒゼンマユミ(絶滅危惧環境省I・B・福岡県II)



写真②ヒゼンマユミ

沖ノ島でタブノキに次いでよく目にする木がヒゼンマユミ(写真②)である。ヒゼンマユミは、長崎県で初めて発見されたとされる樹木で、一般的にはあまり知られていない。通常は、大木の木陰などに生える中低木である。沖ノ島では、タブノキとともに祭祀遺跡の中にも多く生えており、磐境、神籬とよばれる祭祀空間全体の独特な雰囲気演出している。一見すると特徴のない樹木であるが、その素朴さが、巨岩とあいまって厳肅な空間を作り上げているのである。島の北側では、中低木だったはずのヒゼンマユミが大系木としてその数が多く、夏に白い小さな花を咲かせる。十一月には見事な実をつける。

(3)イソヤマアオキ

イソヤマアオキ(写真③)は、今回の調査によって二ノ岳と三ノ岳の間の鞍部に自生していることが約八十年ぶりに確認された植物である。葉脈に特徴があり、成長しても二m前後の低木である。自生している場所は、日



写真③イソヤマアオキ

差しがさほど当たらず、日常的に霧のような霞がかかっている場所である。島内では、この場所以外に自生が確認できず、コケミスと似たようなごく限られた環境で繁殖する植物である。

(4)ビロウ



写真④-1ビロウ

沖ノ島の北東の尾根に自生するビロウ(写真④-1)は、シダ植物であるオオタニワタリとともに亜熱帯植物が自生する北限とされている。沖の島漁港から二ノ岳を挟んでちょうど対角線上に位置していることもあって、ビロウが自生しているところに到達するまで片道二時間以上を費やす。筆者は、これまでビロウの自生する場所に四回訪れた。最初は大島の佐藤守氏の案内で、二回目は3D映像の撮影、三回目はレッドデータブック作成に伴う調査、四回目は、「沖の島原始林」保存管理計画の調査である。成樹二本、幼樹二本の計四本確認できる。成樹の幹肌には、落書きが刻み込まれている。写真④-1の右側の成樹には「大正六年」「角助」「角」「〇〇六文」「〇〇鋭四小四〇〇〇〇」「(写真④-1-2)」「山口七之助」「金次郎」(写真④-1-3)の文字が、写真④-1の左側の成樹には「〇〇長テ」「十二年五月」「吉三口」の文字がそれぞれ人の目線の高さに刻まれている。成樹は海上から視認できるが、幼樹二本は周辺の樹木に

囲まれ海からは見えない。沖ノ島では、ここだけの自生であり、コケミズやイソヤマアオキとは違った繁殖方法ではないかと思われる。つまり、繁殖条件が限定されているのではなく、たまたま種が落ちたところから繁殖したのではないだろうか。極端な気候変動がない限り、島内での絶滅は心配ないであろう。



写真④-2山側の幹の面



写真④-3海側の幹の面

(5) イワレンゲ(絶滅危惧環境省I-B・福岡県I-A)



写真⑤イワレンゲ

イワレンゲ(写真⑤)は、禊場周辺に露出している頁岩に生える植物で、周辺植物とはある種変化を持たせた青緑色のバラの花のような形状の多肉植物である。十一月ごろツリー状の花を咲かせ二年草としての一生を終える。その後の観察では、毎年五〜六株ほどが確認されており、環境の変化や地盤の変化がない限り絶滅する危険はないものと思われる。そもそも

もイワレンゲは、古民家などの葦葺屋根や木の腐りかけた屋根等に繁殖するため、戦前戦後の玄界灘沿岸の集落にはどこにでも目にする植物であったが、高度経済成長期を境に鉄筋の建物に替わり繁殖環境の大きな変化から個体数が激減し、現在ではかなり珍しい植物となってしまった。ちなみに田島周辺の古民家にも小さい株ではあるが自生が確認されていることから、本土側にもまだ繁殖が認められる。

(6) コケミズ(絶滅危惧福岡県I-A)

コケミズは(写真⑥)、沖ノ島においてある特定の場所のみに自生していることが確認されている。岩場ではあるが常時乾燥しているわけではなく、また、北西側に面しているため直接日が指すこともなく、かといってジメジメしている場所でもない。こうした絶妙な生育環境にある場所が沖ノ島のなかでも唯ここだけに存在する。その奇跡的な場所にコケミズは繁殖する。

調査時、沖ノ島島内に他の自生地がないか確認したが、調査員の立入れる範囲において同種の植物を見ることはできなかった。福岡県内では、他に英彦山の岩場のみで見つかったということであるが、県内での自生地が沖ノ島と英彦山の二箇所だけであるということは、先の条件に合致した環境はなかなか整わないことを示している。十一月に観察した際には、既に跡形もない状況



写真⑥コケミズ

であったが、夏には元のように生育していることが確認できた。この植物は、二年草であり、沖ノ島では、毎年このような繁殖を繰り返していると思われる。

(7)フウラン(絶滅危惧環境省Ⅱ・福岡県ⅠA)



写真⑦フウラン

フウラン(写真⑦)は、「風蘭」と書くように通常人の手が届かない高所に着生する面白い植物である。沖ノ島では、一ノ岳から見下ろす岩肌の中腹の割れ目にある幅10cmほどのスペースに所狭しと自生している。また、沖津宮社殿に向つて左側に伸びるクワノハエノキの高木を見上げると細い枝に列を成して着生しているところを観察できた。調査を行った日は、そのフウランが地面に落ちていた。これは、数日前に吹いた強風に煽られたためと思われる。黄色いガクに包まれた白く細長い花をかわいらしく咲かせる。

(8)ハママギ(絶滅危惧福岡県絶滅?)

ハママギ(写真⑧)は、福岡県レッドデータブックで絶滅とされた植物であるが、その後天然記念物の保存管理計画策定に伴う調査において沖ノ島に自生が確認された。このときは、大麻畑と呼ばれるところから沖の島漁港までの海岸付近を歩いている



写真⑧ハママギ

途中に発見した。しかし、確認できたのはこの一株のみである。その後の観察は行つておらず、繁殖の確認はしていない。

(9)ダルマガク

ダルマガク(写真⑨)は、玄界灘沿岸の岩場に繁殖するといわれる珍しい植物である。十一月に花を咲かせるが紫色から白色の花びらで、肉厚な葉に産毛のような繊毛があることが特徴である。花は、キクそのものであるが葉はキクに見えない。大島では、沖津宮遙拝所の海岸の岩場や神崎灯台の岬の岩場に多く自生する。沖ノ島の南南東1kmほどのところにある小屋島に生える植物の半分の面積をダルマガクが占めるのではないかと思うほど、同島では数多く繁殖している。一方、沖ノ島でのダルマガクの繁殖は、確認されていないが、白岳周辺などは繁殖の条件が整っているとと思われる。立地条件により大きく左右されやすい植物である。



写真⑨ダルマガク

(10)オオタニワタリ

オオタニワタリ(写真⑩)は、観葉植物としてもよく知られる植物であるが、自生するものとしては沖ノ島が北限とされている。沖ノ島のなかでもとくに南側斜面の岩が露出している場所に多く繁殖し、沖津宮社殿に向かって右側の

A号巨岩とその周辺にも生えている。特に黄金谷と呼ばれる場所は、湿度が高く、あまり風が吹かず、比較的温暖で岩がたくさん露出している環境であり、シダ植物が多く好む環境である。そのなかにオオタニワタリが群集し、より大きな葉を伸ばしている。逆に島の北側では、ほとんど観察することはできない。



写真⑩オオタニワタリ

二、動物

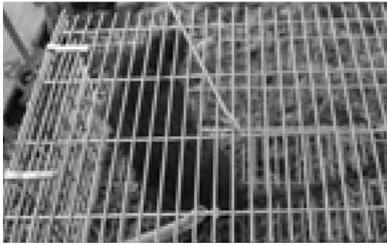
(1) 哺乳類

ア・ネズミ

沖ノ島におけるネズミの存在は、青柳種信が残した『瀨津島防人日記』にも記されており、江戸期にはネズミがいたことがわかる。戦後、沖ノ島に半年間住み込みをしていたという大島の古老の話や沖ノ島祭祀遺跡の調査時の証言

でも、沖ノ島には大量のネズミがいたという。昔から沖ノ島にネズミがいたことは間違いないと思われる。

オキノシマジネズミがいたことが「福岡県高等学校生物部会」一九七〇発行の調査報告書で報告されているが、その後は確認されておらず、研究者のなかではナゾを多く残す生物として興味深い。オキノシマジネズミは、モグラに近い仲間とされ、確認され



写真⑪クマネズミ

ば固有種の大発見となるが、それも絶望的な状況である。仮に絶滅したと考えると原因としてネコの侵入が考えられる。沖ノ島にネコが確認されたのは昭和四〇年代以降と考えられ、漁船などに紛れ込んでいたとする説が有力であるが侵入ルートについては未だ不明な点が多い。

保存管理計画の基礎調査において、ネズミの分

布状況などを捉えるべく、沖ノ島に四か所のトラップを仕掛けた。その四か所は、漁港に建つ社務所周辺、沖津宮及び祭祀遺跡周辺、オオミズナギドリが多く生息していると思われる場所、黄金谷のジメジメした場所である。結果、いずれの場所も例外なくクマネズミ(写真⑪-1)、ドブネズミ(写真⑪-2)が捕獲された。クマネズミは、耳が大きくややぐんぐりとした体形で毛もやや長く性格もおとなしいが、ドブネズミは、クマネズミに比べるとやや小柄で、トラップの中でせわしなく動き回り、「シャー、シャー」と威嚇していた。

ネズミに対する最大の関心事は、オオミズナギドリ同様、沖ノ島の生態系にどのような影響を及ぼしているのかということである。沖ノ島にネコが増えたときに一時的にはネズミが減つたとされているが、そもそもネコも外来の生物である。ネズミは病原菌を媒介する駆除対象生物であるが、沖ノ島においてネズミがどのような影響を及ぼしているのか不詳である。小屋島のカンムリウミスズメやヒメクロウミツバメが絶滅に瀕したようなことが起これば、駆除の必要性もあろうが、小屋島と沖ノ島では、明らかに生態系の違いがあり、こちらも今後の観察を続ける必要がある。



写真⑪-2ドブネズミ

イ.コウモリ



写真⑫アブラコウモリ

沖ノ島で注目されたのは、コウモリの存在の有無である。夜間活動するコウモリの存在を確認するため、コウモリが発する超音波を受信する器械を片手に調査を実施した。器械からは、「キー」や「キュー」といった音が聞こえ、専門家によると間違いなくコウモリが飛んでいるということであった。そのため、アミを仕掛けてコウモリの捕

獲を試みたが、沖ノ島には午後七時を過ぎるとオオミズナギドリが二斉に戻

てくるため、捕獲はできなかった。昼間は、岩の隙間や洞窟のような場所に潜ん

でいるということで、大麻畑下の崖面の岩の割れ目や、戦時遺構である弾薬庫

の暗い構造物内などをくまなく調査したが一匹たりとも確認することができ

なかった。ところが、沖ノ島レッドデータブック作成に伴う調査最終日の早朝、漁

港の東側に黄金谷から染み出している水たまりがあり、そこでアブラコウモリ

(写真⑫)を捕獲した。今後、個体数や種類など詳細な調査が望まれる。

(2) 鳥類

ア.オオミズナギドリ

沖ノ島を代表する鳥類は、オオミズナギドリ(写真⑬)である。通称オガチと呼ばれるが、その語源は地面に巣穴を穿つ(ウガツ)ことからきているともいう。

沖ノ島には、最大十萬羽がいると言われていたが、今では、十五萬羽という数字



写真⑬オオミズナギドリと飛び立ち木

もあり、全体的に数が増えているのではないとも言われている。無数にある地面の穴を誤って踏み割った巣穴の中からヒナが顔を覗かせることもあるが、成鳥は昼間は海に出ており、島内でその姿を見ることはまれである。

この鳥は、地面から直接飛び立つことができないため、地面を歩いたり走ったり、傾斜が急な場所では、腹を地面につけて滑って移動する。島から二斉に飛び立つていく際に、ほぼ同じ場所を毎日、地面を大群で移動することから、下草がまったく生えていない場所がところどころ見受けられる。まるで、箒で掃いたかのような地面の模様、落ち葉の状況がその移動の痕跡として観察される。

午前三時から四時頃、オオミズナギドリは、高い岩の上や木の枝などから飛び降りるように海へ飛び立っていく。沖ノ島には、そのような場所がいくつもあり、特に、タブノキの幹がななめに聳え、鳥が登りやすい巨木を「飛び立ちの木(ぼく)」と称し、その木に集まって列を成して飛び立っていくのである。「飛び立ちの木」は、そう数があるわけではない。それでも、飛び立ちの下手な個体は、そのまま地面に落ちて、また同じ木に登ってやり直す。それを何度も繰り返す不器用な個体もいるのである。

オオミズナギドリは午後七時頃島に戻ってくる。自分の巣がどこにあるのかを知ったうえ島に戻ってくるのであろうが、沖津宮社殿周辺で観察していた際には、上空の木の枝に引っかかってそのまま地面に落ちてきた。鳥が上から降ってくる印象である。昼間の静けさに反して、午後七時から午前四時にかけては、子どもの泣き声に似たオオミズナギドリの鳴き声が島中に響き渡る。

なぜ、昼間オオミズナギドリは島内で姿を見せないのだろうか。ある日、弱ったオオミズナギドリが漁港に張っていたテント近くに歩いてきた。衰弱してきたために、夕食の一片を与えてみたが、回復しなかったのだろうか。翌朝、空を飛ばずにいたその鳥は、トンビの餌食となって消えてしまった。明るくなつていつまでも陸地をよたよたと歩いていると、トンビやハヤブサなどの猛禽類がいるこの島では、姿を見せるだけで大変危険なのである。沖ノ島にネコが持ち込まれたとき、オオミズナギドリがネコに襲われたという事例があったようで、今もオオミズナギドリの死骸を島で見ることがあるが、ネコに襲われた可能性もある。

オオミズナギドリについては、その通称の由来ともなった巣穴を地面に穿つことが問題となっている。沖ノ島は、国の天然記念物でもあり、また国史跡「宗像神社境内」にも指定されている。一か所に二つの指定の網がかかっている場合、どちらを優先して保護するかという課題がおのずと出てくる。沖ノ島における埋蔵文化財とオオミズナギドリの巣穴の関係であるがまさにそれに該当する。沖ノ島祭祀遺跡の二号露天祭祀遺跡は、土器や石製の祭祀品などが現在も大量に散布している重要な遺跡であるが、オオミズナギドリによつて地面に巣が作られることによつて、史跡の保護が困難となる。沖ノ島祭祀遺跡は、史跡の中でも核となる部分として、天然記念物の保護を超えて優先的に保存管理しなければならないだろう。そのため、沖ノ島祭祀遺跡を中心にオオミズナギドリがどこにどれくらいの密度で営巣しているのかの調査を行った。この調査によつて、沖ノ島全体における巣の分布状況や密度の度合いなど、営巣場所の傾向などが明らかとなった。あわせて祭祀遺跡内の

具体的な分布域を確認することができた成果は大きい。

オオミズナギドリの営巣場所は、角度十度から二十度のやわらかな土に多い。また、巨岩と地面が接するところにも多い傾向にある。急傾斜地や平らな地面、礫が堆積していたり下草が多く茂っていたりする場所は少ない傾向にある。巣穴は、何年も再利用している穴もあれば、新たに穴を掘るといふことも考えられる。オオミズナギドリの個体数が年々増えているのではないかと指摘もあるが、もしそうであれば巣穴の数が増え続けることになり、遺跡に多大な影響が出てくる可能性がある。

沖ノ島祭祀遺跡を調査した昭和二十九年から昭和四十六年までの写真を見ると、露天祭祀遺跡には今ほど巣穴がなかったようにも見える。この点については、沖ノ島に詳しい大島の古老に話を伺ったが、格段に個体数が増えたような話はなく、現状において個体数の増減について結論は出ていない。今後のモニタリングによつて状況を見極め、祭祀遺跡、特に露天祭祀遺跡における保護のあり方を検討していかなくてはならない。

イ・ウチヤマセンニユウ(環境省I・B・福岡県II)

ウチヤマセンニユウ(写真⑭)は、希少な鳥として研究者の中では有名であるが、一般的にはほとんど知られていない鳥だろう。スズメより一周り小さく、朝日が射す前後や夕暮れに漁港近くの崖面で鳴き声を聞くことができる。



写真⑭ウチヤマセンニユウ

ウ.カラスバト(環境省準絶滅危惧種 福岡県Ⅱ)



写真⑮カラスバト

カラスバト(写真⑮)は、国の天然記念物に指定されている貴重な鳥で、大島や地島にも生息しているが、特に沖ノ島は個体数が多いようである。カラスよりさらに大きく、全身は深い青色をした儼かな鳥である。「ウー」と唸るような特徴的な鳴き声で、昼間、鳴き声でどこにいるかを確認できる。調査のときは、オタカ奥の雑木に二羽のカラスバトが確認された。おそらく「つがい」だったと思われる。

エ.カンムリウミスズメ・ヒメクロウミツバメ(いずれも環境省Ⅱ・福岡県ⅠA)

沖ノ島の鳥の貴重種としてカンムリウミスズメ(国の天然記念物 写真⑯-1)、ヒメクロウミツバメ(写真⑯-2)の名が挙げられることがあるが、実は沖ノ島での生息や繁殖は確認されていない。沖ノ島の南南東約1kmのところにある小屋島(写真⑯-3)という岩礁が繁殖

地となっている。最高所海拔二十九五mの小屋島は、海拔十m以上の高さでは、波による浸食をほとんど受けないうために、ヒゲスゲやダ



写真⑯-1カンムリウミスズメ



写真⑯-2ヒメクロウミツバメ



写真⑯-3小屋島

り、そこでできた土を穿つて叢に隠れるように巣穴がある。沖ノ島と小屋島の大きな違いは、ネズミの生息の有無である。カンムリウミスズメやヒメクロウミツバメは、ネズミにも襲われてしまう弱い鳥で卵やヒナがターゲットとなる。二十年前に一度、小屋島にネズミが侵入し、壊滅的な状況になったことがあったようで、今後もこれら貴重な鳥を保護するための対策を検討しなければならない。ちなみに、小屋島へのネズミの侵入については、遊漁船からの侵入説と沖ノ島本島から二斉に小屋島に渡って来たとする説とがある。カンムリウミスズメの卵は、大変おいしく、昔の大島の人たちは、四月になると二斉に卵を取りに行ったという話が残っている。

オ.沖ノ島のその他の鳥類

夜間、オオミスナギドリに交じって、「ホホッ、ホホッ、ホホッ、ホホッ」というリュウキュウコノハズクの鳴き声が聞こえてくる。実際の姿は見えないが、それ以前の調査で朝日新聞の記者が同行したときに捕獲している。フクロウを小さくしたような鳥で、リュウキュウの名の通り南方に生息する鳥である。

沖ノ島が渡り鳥の中継地である証拠に、夏の時期に比べて春と秋の方が鳥の種類が多い傾向にある。つまり、沖ノ島を介して春は北へ秋は南へと移動していると思われる。カチガラスという鳥は豊臣秀吉が朝鮮半島から連れてきたとされているが、ある時期に沖ノ島にも飛んでいたことが確認された。このことよって、朝鮮半島から九州本土に向けて直接飛んでくることも可能ではないかとの指摘もある。

(3) 爬虫類



写真⑰ニホントカゲ

参道を歩いているとニホントカゲ(写真⑰)が参道に沿って積んだ石の隙間にいて、すばやく動く姿を目撃できる。調査のときは成獣のみ確認でき、逆に青色ベースに黄色ラインの入った若いトカゲを見るのがなかったが、別の時期には若いトカゲも確認できたことから季節によって異なることがわかった。調査の間、ヤモリが生息するかどうかの議論となったが、この調査では確認されなかった。

オオミズナギドリがこれほど繁殖しているということは、この島にヘビがないという証拠である。穴を掘って営巣するオオミズナギドリはアオダイシヨウなどのヘビが生息していればたちまち減少してしまうだろう。沖ノ島祭祀遺跡の調査報告書にもヘビがないことが幸いしたと書かれており、沖ノ島は海鳥にとって「楽園」で生息しやすい環境といえる。

ちなみに宗像市神湊の沖合にある勝島は、現在は無人島であるが、ヘビやイノシシが生息しているため、オオミズナギドリの巣などは確認されておらず、沖ノ島とは全く違う生態系を形成している。

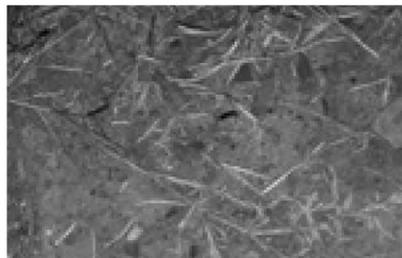
(4) 両生類

爬虫類、両生類を専門としている「いのちのたび博物館」の山根氏は、沖ノ

島において両生類の発見を試み、いろいろな仕掛けや現地調査などを行った。漁港の東側の湧水地や大麻畑の小川、戦時遺構となっている弾薬庫などのコンクリート壁など両生類のいそうな場所をくまなく踏査したが、結果、見つけだすことができず、沖ノ島には生息していない可能性が高いことが結論づけられた。

両生類とヘビがない特殊な環境での生態系を沖ノ島は教えてくれる。

(5) 昆虫類



写真⑱-1ヒメボタル

レッドデータブック調査では、昆虫を専門とする研究者三名が渡島された。なかでも三枝氏は、昆虫研究者としての重鎮である。蚊やハエ等の種類を専門としており、沖ノ島の朽ちた木々に巣を穿った昆虫の幼虫や卵、低い場所を飛び交う虫を捕獲し観察された。ある種の蚊やハエについては、ベーリング海の島々にいる種と同種か近似種ということであり、植物や鳥類は南方系の種が多い中、昆虫については北方系の種が繁殖していることが新たな発見であった。

蝶が専門の矢田氏は、二ノ岳の山頂に生えるクワノハエノキの葉や花に群がるゴマダラチョウに着目した。結局捕獲することはできなかったようであるが、沖ノ島にこれほどの個体数が生息していることが確認できたことが今回の成果であった。このほかモンキアゲハやアオスジアゲハなど本土に広く生息



写真⑱-2コクワガタ

する蝶、渡り鳥のような蝶であるアサギマダラも観察された。また、蛾の種類が極めて少ないという指摘が三枝氏よりあった。その原因としてオオミスナギドリが地面を滑りながら移動するため下草が生えず、本来その下草を住処とする蛾の幼虫が育たないことが考えられるという見解であった。

レッドデータブックの調査以外にも、沖ノ島の昆虫について幾例か述べてみたい。朝日新聞社によるリュウキュウコノハズクの調査の際に、夜、沖津宮社殿周辺の森がピカピカ光るといふ。詳しくみると、それはヒメボタル(写真⑱-1)であることがわかり、後日、沖ノ島の調査でヒメボタルの個体が襖を行う法面にもいることが確認された。

クワガタについても、コクワガタ(写真⑱-2)二個体が確認された。そのうち一個体は、社務所の網戸にいたところを捕まえた。

セミに関しては、捕獲せずとも鳴き声で種類を判断できる。私見ではあるが、ニイニイゼミ、クマゼミ、ツクツクボウシ、ヒゲラシを確認できた。九州本土にいるセミの種類と比較して基本的には大きな違いは認められない。ただし、アブラゼミの鳴き声だけはこれまで聞いたことがなく、沖ノ島にはいない可能性がある。また、ヒゲラシは、名前の如く本土では早朝及び日暮れ時に盛んに鳴くセミであるが、沖ノ島では、特に灯台へ登る北側の斜面山道に多く分布し、昼間でも鳴き声を聞くことができる。

レッドデータブックの調査は、六月に実施したため、真夏に活動する昆虫について詳しく調査したわけではない。特に沖ノ島の風物詩となっているのが、梅雨明けからお盆にかけて大量発生するアブである。ある神主によると沖ノ島の滞在中(約十日間)に、コーヒの瓶に半分ほどのアブを捕獲したという話がある。夏場はとにかく大量のアブが飛び交っている。このアブのやつかいなところは、人間の皮膚を刺し、体液を吸うことである。刺された瞬間はチクッと痛み、その後患部が赤く腫れ、体質にもよるのだろうが、半年くらい跡が残ることがある。刺されたところが痛痒いことから掻き篋り、そこから出てきた体液にさらにアブが集まるという悪循環となることもある。

また、夜間の撮影時にライティングに照らされた明かりに大量のアオドウガネが群がるという光景を目にした。これは3D撮影による映像で収録している。

十一月には、本土でみるハエより一回り大きな黒いハエを見ることができた。この時期、ツワブキの黄色い花が参道などに咲き誇っているが、その花の蜜を吸うために群がっている光景を観察できる。

これだけの多様な昆虫がいる背景に、沖ノ島の自然の豊かさがある。昆虫のみならず動物については、まだまだ未知の種類が生息していると思われる。特に、カタツムリやキセル貝など陸生の貝類がかなり生息しているが、その分野の調査は行われていない。周辺を海に囲まれた沖ノ島の陸生の貝類が大陸や日本列島、壱岐・対馬との関係でどのような共通点や相違点があるか、或いは固有種なのか、今後の新たな発見を待ちたいと思う。

沖ノ島は大正十五年に「沖の島原始林」として国の天然記念物に指定され、さらに信仰に基づく厳重な禁忌が今も続いている。そのため、人の行き来が制限され、島内は特異な環境が維持されている。沖ノ島以外では、人の影響で既に絶滅しているような動植物が、ここでは、けなげにその子孫を残し次世代にその命をつないでいる。ごく限られた条件でしか自生しえないコケミズが存在や絶滅と判断されていたハママギの自生、カラスバトやカンムリウミスズメの生息などは沖ノ島やその周辺における特有の自然環境だからこそ存続し得た。沖ノ島の生態系を観察することは、ほとんど人為的な影響を受けず、ありのままの自然のなかで変化するもの、或いは変わらないものの目の当たりにすることでもある。

沖ノ島では、古代以前からこうした特有な環境に人類が出会い、古墳時代以降、海域の安泰、航海安全を願って、この特別な場所で祭祀を行い、それが現在にその痕跡を残しているのである。戦時中の軍事施設の整備の関係で、一部は伐採などの手が加わった部分もあるが、祭祀遺跡とその周辺は、植生の状態からみても古代の情景とほとんど変わらない奇跡の空間であるといえる。このような希有な島を保護し、未来へと残すことが、今を生きる我々に課せられた使命である。

参考文献

- 一九三三 沖の島学術調査報告(二) 竹内 亮 福岡博物学雑誌
- 一九三五 沖の島産維管束植物目録 竹内 亮 福岡博物学雑誌
- 一九七一 沖の島生物総合調査報告 大場隆康 福岡県高等学校生物部会
- 一九七七 壱岐の生物(壱岐・対馬・沖ノ島を含む)長崎生物学会
- 一九七九 福岡県の名勝・天然記念物 福岡県教育委員会 福岡県教育庁 管理部文化課
- 二〇〇七 宗像市自然環境調査結果報告書 宗像市
- 二〇一一 福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック二〇一一植物群落植物・哺乳類・鳥類― 福岡県環境部自然環境課
- 二〇一四 国指定史跡「宗像神社境内」国指定天然記念物「沖の島原始林」保存管理計画書 宗像市教育委員会

写真⑦、⑭、⑮、⑯―1、⑯―2は、九州環境管理協会 岡部海都氏撮影